文芸欄

俳句

篠原句会（灘区）

雪深し兄に背負はれ登校す　木原　愛子
御年玉嬰児しっかり胸に抱き　清水　昭子
横断歩道会釈して寒和み　渡辺　寛治
喪のハガキ面会自粛の友逝くと　横田　昌子
梅一輪はなやかなりし我が庭も　伊藤　秀子
一・一七忘れ得ぬ刻五・四六　仁居津　勲
車窓より見えたる富士や冬日和　村上　弥廣

宝愛句らぶ（中央区）

故里の小川なつかし猫柳　和子
今さらに清し香放つ水仙花　悦子
早春賦夫の鼻歌散歩道　千枝子
木の橋の遠き記憶や猫柳　道子
老いらくの恋の惑いや春の雪　丘
プレゼント熨斗に添えたる猫柳　和志
猫柳恋するようにゆれている　哲男
東風吹かば春一番や遠からず　啓臣

梅の美会（兵庫区）

銀盤に輝く選手春来たる　山口　茂子
もてなしの斎の葛湯を寺縁にて　藤井　歌子
天満宮撫で牛光り梅薫る　岡田富早恵
冬五輪熱い戦い幕閉じる　林　静野

上階の足音軽し春隣　山田　朝子
咲き誇るブラジルの国花イペといふ　粟野　富江

青葉クラブ（北区）

寒の水飲み干し伸ばす背筋かな　馬場みつえ
風の音暫し静かや冬凪か　山本　恒雄
朧夜や灯火うるみて風温し　前川　弘子

高原ささゆり会（北区）

春野原駆けて転んで未来の子　てる子
かよい道芽吹きて軽くなる歩調　松村二三枝
痛痒といつしか馴染み蕗の薹　佐藤伸二郎
蝋梅のひと枝折りて友が去り　佐藤かなめ
手作りの雪のケーキに得意顔　南　久美子
涙目の鼻むずがゆい春の風　山下　久一
遅桜散りてただよう隠れ里　若林　節子

花山会（北区）

朝日受け一輪づつの庭老梅　林　巳三子
ざわめきし世情に篭り春寒し　井関　礼子

ひまわり句会（北区）

昼さがり孫と散歩やねこ柳　辻　寿賀子
搗きたての紅白餅や二の午祭　石井　敏子

ひよどり台句会（北区）

夫病んで芽吹く木々にも心寄せ　塩見　光子
近づきて又離れ行く春日かな　田中　弘子
松葉蟹店さき赤く香住街　筒井　豊子
澄み渡る寒満月の神神し　中井　光子
針箱の整理し久しく二月かな　矢谷登美子

北斗句会（北区）

木鼠の跡点々と木の根明く　増田　嗣夫
木の根明く大地目覚める日の近し　岸下　庄二
蒼天を突き刺すよふに梅一枝　松本　洋子
梅が香の天満宮の絵馬の数　黒田　久江
土地勘も少し衰ふ梅探る　金行　隆
春吹雪小猿を守る猿団子　脇坂有多子
梅二月苔色の花器引き立ちて　藤井久美子
野仏に薄日さして木の根明く　久松　礼子
鶴林の夜半となりけり涅槃雪　北条　幸夫
井戸端は母の領域梅の花　秋山　弘之

福寿草句会（須磨区）

着ぶくれて吾身一つを守りけり　松下修二郎
大地震の記憶は今も風冴ゆる　上原　綾子
息吸ふて吐いて一の字吉書かな　岩田美代子
枝から餌餌から枝へ寒雀　林　慎一
春浅し杖をたよりに山路行く　高見希豫子

多聞台ときわ会文芸部（垂水区）

街路樹の木の芽膨らみ鼓動聞く　大畑留理子
ふる里の座敷は広し木の芽風　中村佳代子
ひっそりと人目しのんで久下桜　久下　順司
もらわれて行く猫鳴かず木の芽雨　山本雄二郎
窓の外新芽にやさしい小雨かな　樋山　隆夫
コロナ禍も季節はめぐり木の芽吹く　木村　敏博

桃山台クラブ文芸部（垂水区）

退院のベンチの夫に春日かな　田畑美恵子
白梅のつぼみふくよか時を待つ　大上　昭敏
冬温し心はずませ歩く会　溝口としあき

短歌

花山短歌会（北区）

葉の丈はまだ短きに早々とほころび初めし紫蘭のつぼみ　水越　敦子
干し物の手を止め眺む四方の山冬から春へと色変りゆく　木下いく子
運転士のすぐの座席が大好きな須磨より明石へと早春の海　古林　保子
最後の日中学からのブラスバンドの神戸開演孫の吹き納め　礒元カヨ子
かつて我新聞記者になりたくて小五の担任にカメラ教わりき　船崎めり子
無理をせず己が衰え受け入れて楽しく生きん先ずは九十歳へ　山田加壽代

◆個人

コロナため医療従事者方々のたゆまぬ努力うれしく感謝　(灘)酒井　郁美
漠然たる不安の胸の薄氷が静かに溶けゆく便り届きぬ　(灘)上田　節子
忘れ物あるのか低くとぶ蝶に枯葉が風とそっとたわむれくる　(中)水口　敏子
米寿すぎ今朝も元気のご挨拶孫子に向けて絵文字の送信　(兵)大賀　清子
還暦の祝いの歳となりし子に祝ってやりたし老母は思案　(北)眞木香代子
バス終点ぶらり散策一ノ谷戦の歴史に思いを馳せる　(須)江口　啓子
一人居の静かな夜をさらさらと砂の時計がきざみ続ける　(西)秋山シズヱ
山里の菜の花束ねて孫たちは鏡を見つめて笑顔あふれる　(西)瀬尾省二郎
目覚めれば話相手が横にいてよしなしごとを紡ぐしあわせ　(西)古西　澄子
冬の陽に葉紋を浮かすゼラニウム日溜り色に染まる軒先　(西)松浦　妙子
浜えびす二歳の孫と立ち寄れば小判ひろたと黄金落ち葉を　(西)吉野　洋子

川柳

桂木ひふみ会（北区）

ペーパーレス頭の中も空っぽに　荒木　宗Q
ふきのとう可愛いフォルムに苦味あり　上原みなみ
桜の下なぜか素直になれそうで　京念久美子
背中に惚れて猛アタック今があり　笹岡　淑子
二十才は青春還暦は静春　杉尾　悦子
遅まきに恋に目ざめたおぼろ月　大和ケント

きらく句会（西区）

今日だけは夫の手作り小正月　田野　育利
冷えし掌になお溜息のエタノール　森本　珠実
桜餅味の違いで知る東西　阪本　道子
今年またひいなに逢えて齢数え　山本スミ子
コロナ禍の春誕生日満二歳　大橋　治子
春を待ち淀む水面に小石投げ　喜田　弘征

月が丘むつみ会（西区）

冴返る夜のとばりに春遠し　弐井　勇二
昨夜の雨色うるわしき木の芽山　藤森　勝子
紅梅も薄化粧艶やかなるや　川上　富範

◆個人

冷え込みし雪の花散る小雨中　(東)弐田　勝子
八十過ぐもモーニングコーヒー春うらら　(灘)福井　悦子
絵手紙で春の夕焼届きけり　(灘)山上　幸子
紅梅の色の深さや日も西に　(北)竹村　良子
卒業式方程式で解けぬ恋　(須)福本　和恵
春寒し紅茶を淹れて砂時計　(須)渡辺眞佐代
立春や影の弾んでゐるやうな　(須)高橋　統子
あでやかや五輪ファッション開会式　(垂)藤田　恵子
須磨寺や琴の音流る浅き春　(垂)山田としゑ
盆梅の一枝一枝に愛宿る　(西)小幡美沙子
四阿の天井揺らす春の水　(西)寺岡　洋子
蝋梅が気高く咲いて集い寄る　(西)濵頭ミノル
堀越しにネオンのごときスズメ瓜　(西)古西　研次